ウォーキングで知るおもろい現実

（年取るということ日誌から）

ＣＬ教育研究会　遠間美保子　amhotm@gmail.com　http://docl.jp

2008/08/18
お盆が過ぎて今日はなんの日やら、あちらこちらの寺に向かって卒塔婆を持った人が歩いている。目的地の寺院の参道で、二十数名の高齢の女性の一群がそれぞれ卒塔婆を持って、どこぞの寺から出てきて離れた墓地に向かっている。一群の後ろから九十歳を越えたお年寄りと六十代後半の女性が歩いてくる。二人の話というより、耳が遠くなっている母親（たぶん）に話しかける若い方の大きな声が耳に入る。「カラス除けの網があるでしょ？」「……」「ゴミ捨てのところにあるネットよ」「…」（うなずいている）「○○がね、ネットに足がひっかかって、足を取られて、ころんで、骨折…」。たぶん、親戚の人が骨折をした状況を母親らしき人に、説明をしているのだろう。もし、カラスがそのときの情景を見ていたらと想像が湧いて、よそ様の不幸を心の中で笑ってしまう。内面に湧く感情や考え、思いはコントロールできない自然現象なので、善し悪しのモラルはなく、責任はないとＣＬの法則にはあるが、心の中でも他人の不幸を笑うのは罰が当たりそう。そう思うのも自然でただ思いが湧いただけには救われる。

2008-8/26
お母さんが運転する自転車の前に乗った４歳ぐらいの男の子「あっ！ネコが」母「ネコがいたねー」子供「ネコかわいいねー」と本当に可愛くて仕方ないと云わんばかりのしぐさの表情をする。ご本人こそくりくりとしたお目めでとても可愛らしい。ところがその男の子が褒めている、道端にゆうゆうと座り込んでる野良猫はおよそ可愛い表現にはほど遠く、うさんくさい顔で世渡りの上手そうなネコ。お母さんと男の子の自転車が去った後、私「ちっともかわいくなーい」と声を掛ける。猫、座ったまま横目で睨んで「お前だって」。私（はいはい、おっしゃるとおり）。

2008/08/29
朝、歩道を七十歳後半の夫婦が散歩をしている。奥さんの足取りはとてもゆっくりで、普通の速度で歩くご主人はときどき止まって奥さんを待つ。朝のゆったりとした時間が二人の間を流れている。私が後ろからその奥さんを追い越そうとしたら、奥さんは急に車を避けるように、ぽんと飛ぶように左に避けて歩道のポールに掴まった。車の走る音で、急に後から早足で私が近づいた気配に気づかず驚かせてしまったようだ。ふたりのゆったりとしたペースを破ってしまった、元気に見得はる自分に恥じながらそのまま歩を進めた。

2008/09/23
小学校２,３年生の男の子と幼稚園の年中さんぐらいの女の子がお母さんといっしょに歩いている。お母さんが男の子に何かを言ったところ、良く聞こえなかったのか、いつものことなのか「なんていったの、ママ？」するとママは「何回言った？何度もいってるのに」と少し怒った様子。すかさず男の子「３回！」と即答。すると妹が、「一回でちゃんとしたら、○○でお菓子買ってくれる？ママ」ママ「……」。すでになめられているママ、これからのしつけが思いやられる事態。ガンバッテ、ママ！ファイトー！

2008/10/12
高齢の肉付きの良い婦人が二人、線路脇の細道に立ち止まって話し込んでいる。そこへ、やはり太めのもう一人の女性が近づいてきた。二人うちの一人が「あら、お散歩？」顔なじみのような親しさで声を掛ける。

「ええ、たまに日差しに当たらないともやしになっちゃうでしょう」「今日はお天気がいいから、芽が出ちゃうわよ」「そうだとよろしいんだけど…」。話と実際がかみ合わない、もやしのイメージが大きく狂った会話にニターッとしながら横をすれ違った。（**千葉県市川市 CL インストラクター**）

目次へ戻る